

参加型を目指した授業

—特別活動論を実施して

法政大学キャリアデザイン学部兼任講師 福田 祥子

はじめに

特別活動論を担当して8年になる。38年間の高校教員生活を終わり、この仕事を紹介された時は、私にできるだろうか不安だった。私自身は特別活動を意義深いものと捉えてきた自負はあるが、どの学校でも特別活動—特にLHRはかつての同僚たちの悩みの種であり、大きな負担であることを見てきた。そのことへの問題提起、私が実践してきた事、行いたくて出来なかった事を学生と一緒に考え深めたいと思ってお引き受けした。

私は研究会にも所属しておらず、研究論文の書き方も知らない。拙い実践をまとめようと思うが、年報に掲載させていただくには大変稚拙な文章をお許しいただきたい。

一介の教員であった私が、退屈させず、受講して良かったと思える充実感を感じる授業を行うには、学生と一緒に考え、作り上げていく参加型の授業は必須の形態だと思った。私自身、心理カウンセラー資格取得の勉強、性教育のサークル活動、様々な研修の中で習い手となって、「知識ではなく、本当にわかる実感」を感じられたのは、大なり小なり参加型のものだったからでもある。

1 私の特別活動の捉え方

特別活動は教科外の教育活動で学校行事・生徒会・ホームルーム活動である。生徒会指導や学校行事は複数で担当するので、経験がなくても、教わりつつ何とかできる仕事だが、最初から一人で、当たり前でできなくてはなら

ないのが担任としてのHR経営だ。学習指導要領の特別教育活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸張を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」である。多忙な中でも、担任として、教科指導のみに偏らず、この目標と意義を軽視せず、見失わずに、生徒に向き合い、HR経営ができる教師になること、そのための人間観やスキルを持てることを授業の目標にした。

担任は集団としてのダイナミックな動きを指導しつつ、その中で個の存在を埋没させず、大切にし、一人一人の人としての尊厳を守ることが責務である。そのために必要なことは、自己肯定感を育て、他者に対する偏見、ステイグマをなくし、他者を理解する能力、協力し、助け合い、支援を求める能力だと思う。それは自己を開き、他者を受容することにより育つのではないか。そこでこの授業を、私の教員経験を土台としつつ、私が出会って学びや気づきを得たマイノリティ当事者の方から直接お話を聞いたり、ワーク、話し合い、発表を多く取り入れた参加型の授業を目指し、実感することを大切にしたいと思った。

2 学生の状態と授業実施の心構え

最初の2～3年はいわゆる教員志望らしい積極性や表現力があり、意欲を前面に見せる学生が必ず数人いて、グループワークは順調

に行え、目的を果たせた。それが徐々に、表現せず周りの反応に気を遣い、質問もせず、非主張的、自信がなく、書けるけれども発言はしない、そんな学生が増えてきた。ここ2～3年は、「周りの空気を読む」ことに目いっぱい努力をし、緊張してきた様子が顕著である。評価を気にするあまり、教師のちょっとした発言に敏感に反応し、成功体験にこだわる。またコミュニケーションを取ることが苦手と自称する学生が増えた。実は「能力がないわけではないのに」である。

そこで、ここ数年、私は授業の中でワーク、話し合い、発表を繰り返し実施することにした。人はみな違っていい、違いを受容できる。故に、自分は自分でいいと思え、失敗してもいい。失敗した自分を受容できるし失敗から成長する。意見の違いは否定ではない。何人かの力や意見を集めた時に発見や気づきがあり、それが大きな力になる。人も自分も信じていいのだ。評価されジャッジされる心配もなく安心した時に、思いの外素直に自分を表現できること。それらのことを授業の中で実感、体感して欲しいと思った。そのためには、授業の場が安心安全な場、所謂、受講生皆の居場所にならなければならない。それは皆が意識して、協力して作らなければならないことも伝えた。これらは教師になって、担任としてクラス経営をするに当たって、実際に生徒に適用するべきことだとも思う。

3 繰り返した小さなワーク・アイスブレイク・・・講義の合間に、楽しく発見を！

①オリエンテーション時の共通点探し

学生はまさかオリエンテーションからワークをするとは思わない。一通りの説明をした後、4～5人のグループを作り、共通点を見つけさせる。もちろん法政大学生などとわかりきったことはなしである。共通点の数の多さ

を求めるのではない。学年も学科も異なる初対面の人が、探り合いながら共通点を探すことに意義がある。初対面の人とでも、コミュニケーションは案外図れるものと知ってほしい。自己紹介はしてもいいがむしろしないでいい。5～7分程度。時間の感覚を養う練習でもあるから時間は厳守させる。これで教室内の雰囲気は一変する。発表者はじゃんけんでも、立候補でもいいが、必ず発表させる。数は様々だが話し合いの状況、特に共通点の少なかったグループの様子の発表も面白い。ワークのファシリテータはいつも私だ。どの発言もないがしろにせず、どこをほめ、傷つけることなく問題点を指摘できるかがファシリテータの役割である。雰囲気が一変したところで、中学、高校時代にLHRで行ったことを話し合う。これも10分程度。今度は別の人に発表させる。ここで実際の学校現場でいかにLHRがないがしろにされてきたか明らかになる。記憶にない学生が大半なのだ。しかし、数は少ないが素晴らしい実践例も明らかになる。特別活動をどう捉えるか、十分な動機づけになり、ワークにより、楽しかった、仲良くなれた（名前も知らないのに！）という実感と共に、特別活動の認識を深めることになる。話すことが苦手な学生は少し自信を持ち、得意だった学生は周りを気遣って話し合いに臨んでいる。

②話し合いのルール

二回目の授業の初めには必ずワークのルールを紹介する。私のワークはディベートのような議論、論破の討論とは異なる。そこが多くくの討論とは異なると学生たちも言う。もちろんテーマに沿った討論や議論もとても重要なことだ。が、ここ私の授業では、まず安心安全な場で、自分の意見を正直に言えて、人の意見に耳を傾けることに重点を置く。以下2つの話し合いのルールを紹介し、説明し、守ってほしいと伝える。

[1] フェミニストカウンセリング学会「CR (Consciousness Raising) (意識覚醒) でエンパワーメント」より

- ①人の話をさえぎらない…さえぎられたときは、相手がもう少し話しをさせてと言えるようにする。
- ②質問をしない…グループで話すことに慣れるまで。話したいことより、質問されたことを話してしまいがちになることを防ぐ。
- ③助言、干渉をしない…自分自身の感じ方がはっきりするまでは助言を控える。
- ④批判、中傷しない…話し合いはどちらが正しいか決めるためではない。「非難された」と感じたら、自分の感じ方を表明し、発言者もそれを受け止め、気持ちを伝え、グループ内で了解できればベスト。
- ⑤場に返す…不満、葛藤を抱え込まない。場に返せることは表現する力になる。

「思い切って言ってみよう。恐れなくて。」という勇気を持つ。どうしても言えなかったときはミニ感想文に書き、なるべくもやもやした思いを教室外に持ち帰らないようにする。

[2] ぶれいす東京「Sexual Health」ゲーム編 グラドルルールより

- ①他の人のプライバシーを尊重しましょう。
- ②お互いのペースや「打ち解け方」を尊重しましょう。
- ③自分の個人的な経験や考えをもとに話しましょう。
「みんな～だ」「普通～だ」という言い方は避けましょう。
- ④批判したり、決め付けたりしないようにしましょう。
- ⑤暴力は絶対に許されません。
言葉による暴力もあります。感情のコントロールが難しいときはファシリテータに話をし、グループから抜けさせてもらいましょう。

学生の中には4年生であるが故に、リーダーシップを取らなくてはと、無理な仕切りを

する時もある。そうしなくて良いし、年齢に関係がなく、自然にリーダー的な存在の人はできること、沈黙の時間に耐えることも大切なことと伝える。いつも明るく、活発な討論ができなくてもいいし、経験すれば必ずできるようになること、不活発な討論も良い体験になることも伝える。また発言のパスも有りである。このルールでさらに安心安全な場になっていく。もちろんファシリテータ役の私の観察、発言、まとめが大切なことは言うまでもない。また、討論が活発で楽しかったというグループはグループ員を固定して欲しいと望むこともある。その意見は取り入れない。受講生のどの人とグループになっても、ワークができることが肝心だからだ。全員無口、話が盛り上がらないことも貴重な体験なのだ。友達作りのためではなく、あくまでコミュニケーション力をつけるワークであることを理解させる。

③沈黙のリスナー

3分間で自分が気になっていることを話す。気になる事がない人は嬉しかったことでもいい。聞き手は一言も言葉を発することをせず、頷きと相づち、表情、姿勢だけで話を聴く。3分間は厳守。感想を言い合い、発表する。多くの学生が良く話を聞いてもらえたと感じている。3分間なのに結構話せた、言葉を発しないことは苦痛だった、聞き方が重要だとわかったなど様々な発見がある。よく聞いてもらえなかったと感じ、相手にそれを言えなかった人はミニ感想文にその旨を書いてくる。その時、必ず、どうしてそう感じたかを分析し、思考しているので、これもまた良い経験なのだ。

教師は確かに忙しい。しかし、生徒が「話がある」と言ってきた時に、断らずに3分間の時間を設け、話を聴くことはできるという提案でもある。

④ちょっとした軽い失敗談

まず2人1組で倒れるワークを行う。1人

は後ろに倒れ、一人は支える。見えない後ろの人を信じて倒れるのは難しいことで誰でも恐い。ましてや初対面の人であればなおさらである。その後、人に話せる軽い失敗談を思い起こしてもらい、その失敗談を互いに語る。これも1人3分。聞き手は言葉を発してもいいが、相槌、頷き、目を見るなど話しやすい態度で聴く練習でもある。互いに話した後、再度倒れるワークを行うと、最初より安心して倒れることができる人が圧倒的多数だ。軽い失敗談は心を許す、心を開く1つの方法だ。弱音や本音の表現、オープンな自分を素直に伝えることはコミュニケーションには必須で大切な1要因であることは講義で伝えてある。それを体感する。

⑤文章完成法

以下の項目のいくつかを話し合う。互いを知り、それぞれが違う事を楽しむ。かつて、私が感心した1例も紹介した。若者サポートステーションで出会った知的障害がある若者の書いたもので「男性というものは（紳士）でいるべきだ」！！

- 1 みんなが私を相手にしてくれない時、私は（ ）
- 2 私は（ ）なので、よく困ってしまう
- 3 もし（ ）、犯罪や非行は無くなるだろう
- 4 死ぬことは（ ）と思う
- 5 欲しいものが手に入らないとき、私は（ ）
- 6 規則とは（ ）である
- 7 私が決して肯定できないのは（ ）（な）人である
- 8 女性（男性）というものは（ ）でいるべきだ
- 9 良い父親（母親）とは（ ）（よ）うな）人である

⑥なりたい自分の自己紹介

時代、性別、年齢、収入、場所を自由に決めて、なりたい自分を考え自己紹介をする。聞いた相手は架空の話でも、いかにも現実の話し手らしいところを指摘する。これはある程度顔見知りになってから行う。すぐに楽しめる学生ばかりではないが、案外隠れた自分に気が付き、その人らしいところを見つける注意力や観察力も必要なので、楽しむだけに終わらない。（ex.フランス革命時代の貧しい市民。妻も子どももいるが、旗を持って革命に参加して死んでしまうが碑に名前が残る…など。）

4 コミュニケーションスキルのワーク

①から⑥のワークは講義の合間に行うささやかなもので、様々な研修で知ったり、私が考えたものである。授業としては2・3回目に2コマ、コミュニケーションスキルだけの講義とワークを行う。1つは自己発見・他者理解のワーク。エゴグラムとジョハリの窓を組み合わせたもの。2つ目はアサーティブ（自分も相手も尊重する表現）の理解と簡単なアサーティブトレーニング。どれも、たくさんの本が出版されているのでここでは詳細は割愛する。

5 思考力と発表力を養うワーク

①読書感想文の発表会

課題図書を12冊提示して、その内1冊の読書感想文の提出を課し、評価の1つにもしている。同じ本を読んだ人4~5人を1グループ（2人や3人の場合もある）として、感想文を見ずに1人3分で、それぞれの感想を発表する。自分が発表しようと思った事を前の人が言ってしまったらどう話すかもポイントだ。その後グループ内で話し合い、その内容を5分程度にまとめて発表する。人数が少ない

い場合は輪になって1人ずつ発表という形を取ることもある。同じ本を読んでも視点が異なることを知り、発表の仕方も学ぶ。また、同じ本を読んだ人がいない場合は本のあら筋も伝えながら自分の感想を発表する。読まなかった本に興味を抱いたり、読書の面白みを知ったと言う学生は多い。

②KJ法の応用のワーク

「川喜田は文化人類学のフィールドワークを行った後で、集まった膨大な情報をいかにまとめるか、試行錯誤を行った結果、カードを使ってまとめてゆく方法を考え、KJ法と名付けた。チームワークで研究を進めてゆくのには効果的な方法。多くのデータを集めた後、ブレインストーミングにより、雑多なデータやアイデアを統合し、新たな発想を生み出す。多くの断片的なデータを統合して、創造的なアイデアを生み出したり、問題の解決の糸口を探ってゆく。多数の意見が一目でわかり、小数意見も拾うことができる。」(ウィキペディアより抜粋)

このKJ法を体験する。1回は、「担任したときにどんなことを大切にして具体的にはどんなことをしたいか」、2回目は、最後のワークとして、「集団を意識して、強く生きるにはどんなことが必要か」がテーマだ。いずれも、文章で考え、その文章をいくつか単語化してカードに書き、そのカードを全員が模造紙に貼り、カードの集まりを構造化して、色マジックを使い、絵を描いたり図式にしたり、聞き手がわかりやすくまとめて、グループとしての意見を発表する。年々時間がかかるようになってきていて、最近は時間が足りないとよく言われるが、長時間でじっくり検討する場合もあるが、ここでは、どこで自分の意見を引くか、主張するか、決断力を使い、短時間でまとめることの意義を伝える。30～40分くらい。完成しなくても途中までの過程を発表させることもある。

6 まとめとしての「伝えるワーク」

家や階段の簡単な絵を4枚に切ったカードを用意する。3人で1グループを作り、作る人、伝える人、観察者を決める。作る人と伝える人は背中合わせに座り、互いを見ることなしに、伝える人は絵ができるように4枚のカードをどう動かすか伝える。作る人は伝える人の情報を聞きながら4枚のカードを動かして絵を作る。これも3分。ほとんどのグループが完成させられない。わかるように伝えることが如何に難しいか実感するワークだ。完成が目的ではない。伝えることの難しさを知り、人に伝えるときどんなことが必要かを知ることが目的である。観察者はどんなときイライラするか等を観察する。言葉で伝えるだけで、生徒はわかっているはずだと思ひ込む教師への警鐘の1つとして、まとめのワークに実施している。

7 ゲストスピーカー

多くの人はマジョリティとして暮らし、自然にマジョリティとしての見方、発想をしている。気づかない内にマイノリティの人を傷つける。真に生徒全員の人権を大切にできるようにするには、私の講義より、マイノリティの立場の方のお話を、目で見、直接聞き、自分の中の偏見や狭さに気付いてもらうことがいいと思った。実は当然だが、マイノリティの人々もそれぞれ異なることも実感してもらう。計4回(2015年度は3回)

- ①工業高校時代問題行動を繰り返して、卒業後アルコール中毒に陥り、脱し、今現在会社の経営者として生活している現在50歳の教え子。当時の私(37歳)のクラス経営にも触れる。
- ②性同一性障害、FTM、MTFの立場のお二人に、5～7%存在するというLGBTの生徒にどのように向き合ったらいいかなど生きにくさをも

含めて語っていただく。

③DV・デートDVについての啓発活動や講演活動などを行っている、NPO法人レジリエンスの方に来ていただいて、DVのみならず支配と暴力の構造について語っていただきワークを行う。

④定時制高校勤務の時代の教え子数人に来てもらい、不登校について語ってもらっていたが、仕事の都合でここ数年はできなくなっている。定時制高校の教育については浦和商业高校のDVD視聴で代替えている。

8 多人数での参加型授業は・・・

以上述べたようなワークは小人数だからこそできる。市ヶ谷の5・6限の授業の受講生は、多くて45人少なくて15人程度であった。しかし今年度、小金井で、60人の学生に授業を行うことになった。机の移動もままならない70人用の大教室で、しかも、春学期は生徒進路指導論を行うという。

オリエンテーションの説明の後、共通点探しのワークを行った。心配は杞憂に終わり、市ヶ谷の学生に比べ、共通点が0とか1のグループが多く、難しかったという感想もあったが、多くの学生が楽しんでおり、色々な発見をしたようだ。次に色違いの付箋を1人3枚ずつ配布して、進路指導・生徒指導と聞いて思い浮かべる言葉を3つずつ書いてもらう。黒板に4枚の模造紙を貼り、それぞれポジティブイメージ、ネガティブイメージに分けて、言葉を書いた付箋を貼らせた。似たような内容の付箋は近くにまとめるようにも伝えた。KJ法の応用である。たったこれだけで、面接指導や服装検査など、同じ言葉でもそれぞれが持つイメージがポジティブだったりネガティブだったり異なること、自分が思いつかなかった言葉がたくさんあることを学生は発見する。十分な動機づけになったし、ミニ感想文も好評であった。しかも、模造紙に貼ら

れた内容が生徒指導・進路指導の問題提起になることを発見し、急遽資料を作り、続きとしてじっくり話し合う授業を追加した。生徒指導、進路指導の捉え方の違いや問題点を浮き彫りにできた話し合いになった。この2つのワークから多人数でも何とかワークができるという実感を持たせた。それで、市ヶ谷と同じ内容の授業をやってみようと思った。座席移動の時間短縮のため、ワークをする時は初めから座席指定をしたが問題はなかった。なるべく知らない人とのワークを望んだ学生が多かったためである。

秋学期の特別活動論の終了時には進路変更をして、受講生は48人くらいに減少したが、ワークは学期に2回位でいいのではないかと感想を書いた学生1人以外は、概ねワークが楽しかったし、有意義だったと書いてくれている。

※市ヶ谷では秋学期に生徒進路指導論も担当していて、春学期の特別活動論で人間観やコミュニケーションの基礎を知り、秋学期の生徒進路指導論で各論を深めるつもりだったが、小金井では順番が逆になり、ほとんどが春秋通して同じ受講生であった。

9 特別活動における多機能性

戦後、特別活動は自由研究から始まり、様々な形、内容を変えながら現在に至っている。問題点がないとは言いが、教科学習のみでは為し得ない人間形成の本質的部分を担い、各学校で多様な実践が行われていて、特別活動の成功如何こそが学校教育全体の良し悪しを根本的に左右するとも言われている。学校行事には儀式的、文化的、健康安全・体育的・旅行集団宿泊の行事に加え、勤労生産奉仕的行事まで入る。ホームルーム活動も同様である。生徒指導の機能を十分に生かし、教育相談の適切な実施を付加しつつ、集団作り、青年期の悩みや課題の解決、自己他者個性の理

解と尊重、男女の理解、心身の健康と健全な習慣作り、コミュニケーション能力の育成、ボランティア活動、国際理解と国際交流、キャリアガイダンスを入れた進路指導等々、18項目にも至る内容である。私のシラバスの項目も18項目のいずれかには該当する。ホームルーム活動は特別活動の大事な一翼を担うが、実際には、年間35回の時間の内、かなり、進路指導、学校行事に使われ、担任裁量の時間はごくわずかである。学生が教師になったら、この多領域を逆手に取り、わずかな時間でも、ぜひ自分なりの得意なことを切り口にして、充実したLHRを実施し、クラス経営の要にしてほしい。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 特別活動の捉え方とその意義
- 第3回 コミュニケーションスキル1
- 第4回 コミュニケーションスキル2
- 第5回 ホームルーム経営とは
- 第6回 問題行動を起こす生徒への担任の姿勢と関係性の構築。依存症とは
- 第7回 目指すクラス経営 KJ法
- 第8回 A 高校定時制の特別活動
- 第9回 HRの中でできる性教育
- 第10回 セクシュアルマイノリティ
- 第11回 課題図書感想の発表会
- 第12回 暴力と支配の構造
- 第13回 部活動について
- 第14回 強く生き抜く力をつける集団とは (KJ法)
- 第15回 まとめ

10 終わりに

学期の最後にも書いてもらう授業全体に対する感想はいつも私にとっては大変ありがたく嬉しい感想が多い。今年度のWEBアンケート

トは今現在、提出者が少ないのが残念であるが、過去のアンケートも現在も「楽しく受講できた」を第一に「新しい発見があった」「進路選択に役立った」「交流が出来た」「知的意欲を刺激された」などが多い。自己の生き方を振り返り考えたという感想も多い。

過去に教師としての主張が強いという意見が1つあったが、今年度の理工学部でのミニ感想文の中にも主観的過ぎると2~3名の学生が書いてきているので、心して受け止め注意していこうと思っている。

選挙権が18歳に引き下げられるにあたり、教師の政治的中立性も少し話題に出したが、学生の多数は「教員は中学・高校・大学の区別なく政治的中立は大事だ」と思っている。判断力が育っていない、知識もない中で、無意識に教員が話したことで生徒は意外に影響を受けるという。児童生徒であっても、教師の私的な政治に対する意見を聞いても、それを鵜呑みにするほど子供ではないのでそれほど気にする必要は無い、むしろ教師の考え方を示すべきだという感想を書いてきた学生もいるが少数である。

部活動は特別活動には該当しないが、学校教育の一環とされている。HR経営、学校教育体制に大きく影響しているため1コマ設けている。部活動内で「体罰はいけませんが、信頼関係の上でなら多少の暴力も許されるのではないか、線引きが難しいが強く厳しい指導は必要。当時は辛かったが、今ある自分は部活動での厳しい指導のお蔭だ」と考えている学生が多数で、どんなことがあっても体罰・暴力はいけなしと言いきる学生は少数である。

いじめは「あつてはならないが、なくならない」と表明する学生も多数である。人と違うことがいじめの要因の1つになっているし、どうしても気にいらぬということはあるからといった意見である。何事につけ、社会全体の構造的な要因や責任より、自己責任という概念に強く捉われている学生の率直な意見

も多い。

いずれも、多数の意見が私の考えとは異なるので忸怩たる思いは否めない。社会全体に大きく不寛容や意地悪が蔓延っているのではないかと思う。

評価の目にいつもさらされ、いじめが常に起こっている学校環境の中で過ごし、SNS、ラインなどバーチャルなコミュニケーションが多い社会の中で、息苦しさや生きにくさの一番の犠牲者が子どもと若者だという思いを強くしている。この閉塞感を打破するためにどんな授業ができるか日々考える。ある講演会で、まず大人が思考停止に陥らず、目、耳、手の3つの道具をきちんと行使することだと聞いた。傾聴する耳、涙する目、人のために泣ける目、見抜くことができる目、差し伸べる手、救いあげる手の3つ。同感の思いだ。その道具を持つ教師になって欲しくて、私自身もそうありたいと思いつつ授業の中で地道な努力を続けているつもりである。意見が違っても、違うからこそ、学生の心にできるだけ寄り添い、向き合って思いを伝えたい。顔と顔を合わせ、声を聞きながら、声を発しながら、言葉のキャッチボールができてこそそのコミュニケーションが信じていいものなのだと伝えたい。私と異なる意見や、批判的なことを書いた学生が、最後の感想やレポートにこの授業を受講して良かった、先生を批判して申し訳なかったと書いてくれたことがそんな私の思いを後押ししてくれたような気がしている。

そして半期の中で、学生が少しずつ苦手を克服し、というより、本来の力を発揮できるように変わっていく様を見られる参加型の授業は、やはり教える私にとっても楽しく、発見に満ち、知的好奇心を刺激されている。